

現地を訪問して想うこと

1973年産業社会学部卒 飯沼 眞

私が、今回の東北応援ツアー福島県コースに参加したのは福島県のことについて関西に暮らしていると大震災・大津波・原発事故から3年7ヶ月を経た現在でも「国」と「東京電力」の聞きたくない話ばかりが報道され、今の福島県を知るためには現地に行きたいとの思いからです。

まず、福島県の現地に来て感じたことは、私事ですが岩手県と宮城県の三陸地域沿岸被災地での奉仕に参加してその地域の被害の惨状と復興への取組を「眼」で感じましたが、福島県の浜通りには住民でさえ立入のできない区域があり、さらに被災状況が「眼」で分からない人災の「放射線」と「風評」が加算された被害が大きいことです。

今回のツアーでの行政関係者2氏からの講演は福島県の「被災の現実」と「復興の未来」を感じるものでありました。

① 川内村長 遠藤雄幸氏 講演

川内村長の遠藤雄幸氏からの講演をお聞きして、3月11日大震災・大津波・原発事故発生の翌3月12日に全町民避難となった富岡町民を3日間とのことで川内村が受入れたが、3月14日には今度は川内村全域が屋内退避区域となり、川内村役場を閉鎖し、川内村民3,000人と富岡町民6,000人住民を郡山市域に緊急避難した状況を時系列にお話と次に避難した村民の状況と帰村に向けて取組状況のお話をさせていただきました。震災直後から全国の多方面から人的・物的・精神的な支援があり、村の機能が徐々に回復していますが、3年経過し、村民3,000人のうち1,000人の帰村であり、放射線被害が恐怖、医療関係の不安、生活環境の不安、仕事がない、子供の避難先の通学校から転校、農作物の栽培ができない、避難先で仕事に従事している等などの理由により村に戻れない現状であり、村民のなかで「村に戻る」と「村に戻らない」に二極化しているとの状況を語られ、さらに「逃げるオペレーション」よりも「戻るオペレーション」が難しいことを語られました。帰村者を受け入れる為に企業の誘致や医療環境の整備などなっていますが村民の高齢者の比率が高くなり、まだ、村にはありませんが、「放射線」への取組、企業誘致や雇用の確保、生活の改善など川内村を復興させようとする遠藤雄幸村長の熱意は全国に伝わると思います。

村長の講演後に村内見学させていただきました。その時に高原野菜工場見学や車窓からの村を見て感じたことは、除染ゴミのビニール袋の野積されている状況や道路などの除染作業がまだ続いている村に帰村し、震災前の約1/3になっていますが子供たちを早く帰村させようとする村民の皆さんの勇気と決意が感じられました。

② 福島県企業局長 飯塚俊二氏 講演

福島県企業局長 飯塚俊二氏からは福島県の被害と復興をテーマに講演されました。大震災と大津波の被害、原子力発電所事故に伴う避難指示区域等と避難者の状況、被災者の生活再建、放射線量推移・除染状況と環境回復と災害廃棄物の処理、インフラ整備での福島県の状況と取組を語られました。

特に県民の健康を守る取組、農林水産業の現状と今後の方向性、雇用の創出、食品の安全・安心に向け取組と全国への販路拡大への取組で説明されました。福島県の平成26年度当初予算は、震災前の倍規模となった1兆7千万円余りを計上されて復興に取り組まれています。福島県全体の復興には、福島県の取組が重要ですが県下の市町村と一緒に住民の状況をつかみ、国に対しても東京電力に対しても対峙して欲しいと思います。飯塚俊二氏は校友とのことであり、今後のご活躍を遠方から応援しております。

私は卒業後40年余りサラリーマン生活を終え、それまでは校友会は会報により知る程度であったのですがこの2日間短い期間でしたが応援ツアーに参加して、広小路や衣笠での学生生活と重なる校友やびわこキャンパス出身の若い校友と共に貴重な体験をさせていただく機会を与えて下さいましたことを感謝いたします。

最後に、ツアーを企画しお世話いただいた校友会本部の皆様、福島県校友会の皆様、クレオヒューマンの皆様、JTBの皆様そして関係者の皆様、また、様々なご支援を下さった皆様に対しまして、この書面をお借りしてお礼申し上げます。



遠藤雄幸川内村長 講演



川内村内の仮設に野積された除染ゴミ袋（バス車内から撮影）



川内村内放射線量計(無線回線にてリアルタイムで文部科学省へ送信)



企業誘致された高原農作物工場内部



飯塚俊二福島県企業局長講演